

親鸞依用の『無量寿経論』

辻本 俊郎

- 一、はじめに
- 二、親鸞が引用した『無量寿経論』
- 三、親鸞が依用した『無量寿経論』の手掛かり
- 四、結論

キーワード：親鸞、『無量寿経論』、『無量寿経論註』

一、はじめに

親鸞聖人 750 回大遠忌を迎えるにあたって、筆者は親鸞（一一七三～一二六二）が依用した『無量寿経論』は果してどのようなテキストだったのか、ということに焦点をあてて本小論で考察したい。

親鸞がその著『教行信証』などに依用した世親（Vasubandhu、四〇〇～四八〇）著・菩提流支（Bodhiruci）訳⁽¹⁾『無量寿経論』（『浄土論』、『往生論』とも訳され、『無量寿経優波提舍願生偈』などともいう）⁽²⁾については、これに関わる資料がかなり存在する。まず、曇鸞（四七六～五四二？）著『無量寿経論註』については、親鸞加点本（建長八年、一二五六年）（『親鸞聖人真蹟集成』第七卷、法蔵館、1973）所収があって、実態が明らかである。しかしながら、『無

量寿経論』については、これに当たるものがない。したがって、親鸞依用本の全容を知ることができない。しかしながら、親鸞は、『教行信証』をはじめとする種々な著作に『無量寿経論』の文を引用することが多いから、これらが依用本の実情をある程度探手がかりとあるものと考えられる。そこで、まず、親鸞著作に引用されている『無量寿経論』の文の確認をしたい⁽³⁾。

二、親鸞が引用した『無量寿経論』

親鸞の著作の中で、『無量寿経論』の文が見出されるのは、次の八本である。

- (ア)『教行信証』（具には『顕浄土真実教行証文類』という。元仁元（一二二四）年～宝治元（一二四七）年頃、すなわち親鸞が五二歳～七五歳頃にかけて著した。）
- (イ)『浄土文類聚鈔』（『教行信証』の要旨である。建長七（一二五五）年、親鸞が八三歳の時に著す）
- (ウ)『愚禿抄』巻下（建長七（一二五五）年）
- (エ)『浄土三経往生文類』（建長七（一二五五）年）
- (オ)『如来二種廻向文』（正嘉元（一二五七）年、親鸞が八五歳の時に著す）

(1) 訳出年代については辻本俊郎（2011 ①）を参照されたい。

(2) 『無量寿経論』の題名については辻本俊郎（2010）

を参照されたい。

(3) 親鸞の浄土三部経の依用に関する研究としては、藤田宏達（2007）pp.605-619 がある。

(カ)『往相廻向還相廻向文類』(内容としては『如来二種廻向文』とほぼ同じである。康元二(一二五六)年、親鸞が八四歳時に著す)

(キ)『尊号真像銘文本』(略本が建長七(一二五五)年、広本が正嘉二(一二五八)年に成立)

(ク)『一念多念文意』(正嘉元(一二五七)年)

それでは次にそれらの中に引用されている『無量寿経論』本文を見てみよう。

『教行信証』第二巻(行巻)

- ・浄土論云。我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相応。観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海。又曰。菩薩入四種門自利行成就。応知。菩薩出第五門回向利益他行成就。応知。菩薩如是修五門行。自利利他。速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。(大正八三卷五九二中)
- ・論曰。言本願力者。示大菩提於法身中常在三昧。(云々)。(大正八三卷五九八上～下)
- ・浄土論曰。何者莊嚴不虛作住持功德成就。偈言観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海故。不虛作住持功德成就者。蓋是阿弥陀如来本願力也。(云々)。(大正八三卷五九九上)
- ・浄土論曰。云何廻向。不捨一切苦惱衆生。心常作願。廻向為首得成就大悲心故。廻向有二種相。(云々)。(大正八三卷六〇六上)
- ・論曰。又向説觀察莊嚴仏土功德成就。莊嚴仏功德成就。莊嚴菩薩功德成就。此三種成就。願心莊嚴。応知。応知者。応知此三種莊嚴成就。(云々)。(大正八三卷六〇六上)
- ・論曰。出第五門者。以大慈悲觀察一切苦惱衆生。示応化身回入生死菌煩惱林中。遊戲神通

至教化地以本願力回向故。是名出第五門。(大正八三卷六〇六上)

- ・浄土論曰。莊嚴妙声功德成就者。偈言梵声悟深遠微妙聞十方故。此云何不思議。(中略)安可思議。莊嚴主功德成就者。偈言正覚阿弥陀法王善住持故。此云何不思議。(中略)以逕正覚阿弥陀善住持故。莊嚴眷属功德成就者。偈言如来浄華衆正覚華化生故。此云何不思議。(中略)焉可思議。(大正八三卷六一六中～下)
 - ・又論曰。莊嚴清浄功德成就者。偈言観彼世界相。勝過三界道故。此云何不思議。(中略)焉可思議。(大正八三卷六一六下)
 - ・浄土論曰。出第五門者。以大慈悲觀察一切苦惱衆生。示応化身回入生死菌煩惱林中。遊戲神通至教化地以本願力回向故。是名出第五門。(大正八三卷六一七上)
 - ・浄土論曰。世尊我一心。帰命盡十方。無礙光如来。願生安楽国。観彼世界相。究竟如虚空。廣大無辺際。(大正八三卷六二四上)
 - ・論曰。帰命盡十方。無礙光如来也。(大正八三卷六二六上)
 - ・論曰。究竟如虚空。廣大無辺際也。(大正八三卷六二六上)
 - ・論曰。如来浄華衆 正覚華化生。又云。同一念仏無別道故。(大正八三卷六二六上)
- 『無量寿経論註』からの引用文については『無量寿経論』以上に多くみられる⁽⁴⁾。

『浄土文類聚鈔』

- ・天親菩薩浄土論云。世尊我一心。帰命盡十方。無礙光如来。願生安楽国。我依修多羅。真実功德相。説願偈総持。与仏教相応。観仏本願力。遇無空過者。能令速満足。功德大宝海。(大正八三卷六四四中)

(4)『教行信証』における『無量寿経論註』の引用文については、幡谷明(1989)、早島鏡正・大谷光真(1987)

pp.23-25 を参照。

『愚禿抄』巻上

- ・浄土論曰。世尊我一心 帰命盡十方 無礙光如来 願生安楽国。我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相応。(大正八三巻六四九上～中)

『浄土三経往生文類』

- ・浄土論曰。莊嚴妙声功德成就者。偈言梵声悟深遠微妙聞十方故。此云何不思議。(中略)安可思議。莊嚴眷属功德成就者。偈言如来浄華衆正覺華化生故。此云何不思議。(中略)(大正八三巻六七三上、六七五中～下)
- ・又論曰。莊嚴清浄功德成就者。偈言觀彼世界相勝過三界道故。此云何不思議。(大正八三巻六七三上、六七五下)
- ・浄土論曰。以本願力迴向故。是名出第五門(大正八三巻六七五下)
- ・無量寿経優婆提舎願生偈曰。云何迴向不捨一切苦惱衆生。心常作願。迴向為首得成就大悲心故(大正八三巻六七六上)

『如来二種迴向文』

- ・無量寿経優婆提舎願生偈曰。云何迴向不捨一切苦惱衆生。心常作願。迴向為首得成就大悲心故(大正八三巻六七七下)
- ・浄土論曰。以本願力迴向故。是名出第五門(大正八三巻六七八上)

『往相迴向還相迴向文類』

- ・無量寿経優婆提舎願生偈曰。云何迴向不捨一切苦惱衆生。心常作願。迴向為首得成就大悲心故(大正八三巻六七八中)
- ・浄土論曰。以本願力迴向故。是名出第五門(大正八三巻六七八下)

『尊号真像銘文本』

- ・婆藪般豆菩薩論曰。世尊我一心 帰命盡十方 無礙光如来 願生安楽国。我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相応。觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 廣大無辺際(大正八三巻六八一中)
- ・又曰。觀仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海(大正八三巻六八一中)

『一念多念文意』

- ・浄土論曰。觀仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海(大正八三巻六九八上)

三、親鸞が依用した『無量寿経論』の手掛かり

それでは、親鸞が依用した『無量寿経論』はどういう系統であったかということになるが、これは引用文を通して、現在の流布本や高麗大蔵経などの蔵経本、写本、石刻本とどのような異同を示しているかで判断するより方法がない。そこで、筆者が作成した『『無量寿経論』諸本対照』(2011年、私家版)によって引用された文の一字一句を対比してみると、いろいろ異同のあることが判明した。これは私家版という性質上、一般に参照することは難しいので、筆者が蒐集した25本の『無量寿経論』テキストを紹介しておく⁽⁵⁾。

大蔵経(中国・韓半島)としては、次の11本である。

- 〔東〕宋・東禅寺版(一〇九三)
- 〔開〕宋・開元寺版(一一一二～一一五一)
- 〔思〕宋・思溪版(一一三三頃)
- 〔磧〕宋・磧砂版(一二三八～一三一一〇)

(5)『無量寿経論』のテキストの系譜などについては辻本俊郎(1999)(2004)を参照されたい。また、『無量寿経論』テキストの大半は、筆者が佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班(1995年度から

1997年度)に参加した時に、同研究班が蒐集したものであり、その他は畏友佛教大学齊藤隆信准教授の好意によってそのコピーを入手することができたのである。

〔杭〕 宋・杭州版（一二七八～一二九〇）
〔麗〕 高麗再雕版（一二三六～一二九〇）
〔永〕 明・永樂北藏（一四二一～一四四〇）
〔洪〕 明・洪武南藏（一三七二～一四一四）
〔龍〕 清・龍藏（乾隆版大藏經）（一七三三～一七三八）
〔頻〕 中華民國・頻伽大藏經（一九一一～一九一四）

〔中〕 中華大藏經（一九八四～）
大藏經（日本）として、次の3本である。
〔縮〕 大日本校訂大藏經（縮藏）（一八八一～一八八五）
〔統〕 大日本統藏經（正統藏經）（一九〇五～一九一二）
〔大〕 大正新脩大藏經（一九二四～一九三四）
石刻本は2本である。

〔唐〕 中国・房山雷音洞（隋末唐初（六二〇前後））
〔遼〕 中国・房山雲居寺南塔地下（遼（九一六～一一二五）時代）

写本は次の5本である。

〔聖〕 正倉院聖語藏所蔵（平安時代中期）
〔金〕 河内長野市真言宗金剛寺「金剛寺一切經」
〔七〕 稲嶺山長福寺「七寺一切經」（承安五年（一一七五）～治承四年（一一八〇））
〔光〕 鎌倉光明寺所蔵寂恵（鎌倉時代末）書写本
〔常〕 京都・常樂寺所蔵存覚（一二九〇～一三七三）書写本

流布本

〔浄〕 『浄土宗全書』1巻所収『論』
〔真〕 浄土真宗聖典編纂委員会編『浄土真宗聖典七祖編（原典版）』所収
〔宗〕 『真宗聖教全書』第1巻（三經七祖部）所収

〔親〕 『無量寿經論註』に引用される『無量寿經論』として、親鸞聖人加點本（建長八年、一二五六）

ここでは、これらのテキストの異同について見ていきたい。なお、異同のある、注目すべき箇所についてはゴシック体で記した。

『教行信証』第二卷（行巻）

・浄土論云。我依修多羅 眞実功德相 説願偈
総持 与仏教相应。觀仏本願力 遇無空過者
能令速満足 功德大宝海。又曰。菩薩入四
種門自利行成就。応知。菩薩出第五門**回向利益他行**成就。応知。菩薩如是修**五門行**。自利利他。速得成就阿耨多羅三藐三菩提故（大正八三卷五九二中）

大藏經として〔統〕、写本として〔光〕、流布本として〔浄〕〔真〕〔宗〕、『無量寿經論註』として〔親〕が「回向利益他行」と読んでいる、しかしながら、大藏經〔東〕〔開〕〔思〕〔磧〕〔杭〕〔麗〕〔永〕〔洪〕〔龍〕〔頻〕〔中〕〔縮〕〔大〕、石刻本〔遼〕、写本〔聖〕〔金〕〔七〕は「利益他迴向行」と読んでいる。また、「五門行」については、〔浄〕〔親〕のみが「五念門行」と読んでおり、他の大藏經、写本などは「五門行」と一致している。五念門というのは、礼拝門、讃嘆門、作願門、觀察門、迴向門であり、五門というのは、近門、大会衆門、宅門、屋門、園林遊戲地門である、いうまでもなく、五念門と五門はそれぞれ対応しているのであるが、前者は安樂国土に生まれるための実践であり、後者は五念門を修し、その行が成就することによって得ることのできる五つの功德を指すのである。すなわち、ここでは「念」という字の出入のみであるが、その意味するところは大きく異なるのである⁽⁶⁾。

・浄土論曰。何者**莊嚴不虛作住持功德成就**。偈

(6) 「念」の異同に関しては、合理的に読むならば、「五門」ではなく、「五念門」と理解すべきではないかと

考えられる。詳細については辻本俊郎（2000）を参照されたい。

言観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海故。不虛作住持功德成就者。蓋是阿弥陀如来本願力也。(云々)。(大正八三卷五九九上)

〔続〕〔光〕〔常〕〔浄〕〔真〕〔宗〕〔親〕が「莊嚴不虛作住持功德成就」を支持しており、〔金〕は、「不虛作住持・嚴」となっている。これは写本であるので書写者のミスであろう。その他は「不虛作住持莊嚴」となっている。「遇無空過者」(〔阿弥陀〕 仏の過去世の誓願を観察するに〔それに〕 出会って空しく過ぎていく者は誰一人としていない) については〔七〕のみ「過無空過者」となっており、〔七〕も写本という性質上、「遇」と「過」は部首も旁もよく似ているということもあって書写ミスであろう⁽⁷⁾。

注目すべきは不虛作住持功德成就者。蓋是阿弥陀如来本願力也。」である。「浄土論曰」という引用文であるのかかわらず、『無量寿経論』本文ではなくて『無量寿経論註』の文を引用しているのである。これはどういうことを意味するのであろうか。

- ・論曰。言本願力者。示大菩提於法身中常在三昧。(云々)。(大正八三卷五九八上～下)

この文は論曰としているが、『無量寿経論註』の文である。

- ・浄土論曰。云何廻向。不捨一切苦惱衆生。心常作願。廻向為首得成就大悲心故。廻向有二種相。(云々)。(大正八三卷六〇六上)

「不捨一切苦惱衆生。心常作願。廻向為首得成就大悲心故(一切の苦しんでいる衆生を捨てずに心に常に願をなし、廻向することを第一とす。〔それは〕大悲心を成就できるからである)」と「得」の字が挿入されているのは、〔続〕〔光〕〔常〕〔浄〕〔真〕〔宗〕〔親〕であり、筆者の研究からすると、『無量寿経論註』に見られる『無量寿経論』本文と合致するのである。また、

「不捨一切苦惱衆生。心常作願。廻向為首成就大悲心故」となっているのは、〔麗〕〔頻〕〔中〕〔縮〕〔大〕〔遼〕〔金〕〔七〕の8本であり、その他の宋元明清版は、「於彼觀察一切世間苦惱衆生同願生彼安樂国土願心所有功德善根以巧方便作願廻向攝取衆生不捨一切世間故(かしこ(浄土)において一切世間苦惱衆生を観察する。同じくかの安樂国土に生まれようと願い、心のあらゆる功德善根を願い、巧方便廻向をもって作願し、廻向する。衆生を攝取(救済)して、一切世間を捨てないからである。)」となっており、その字句も、意味するところも大きく異なっているのである⁽⁸⁾。

「廻向有二種相」云々については、不思議なことにここでも「浄土論曰」という引用文であるのかかわらず、『無量寿経論』ではなく『無量寿経論註』の文を引用しているのである。

- ・論曰。又向說觀察莊嚴仏土功德成就。莊嚴仏功德成就。莊嚴菩薩功德成就。此三種成就。願心莊嚴。應知。應知者。應知此三種莊嚴成就。(云々)。(大正八三卷六〇六上)

「觀察莊嚴仏土功德成就。莊嚴仏功德成就。莊嚴菩薩功德成就」を支持しているのは、〔続〕〔光〕〔常〕〔浄〕〔真〕〔宗〕〔親〕であり、これらはすべて『無量寿経論註』系統のテキストである。その他は「仏国土功德莊嚴成就。仏功德莊嚴成就。菩薩功德莊嚴成就」となっており、「功德」「莊嚴」の位置が異なっていることがわかる。

「應知者。應知此三種莊嚴成就」云々は前述した文と同様、『無量寿経論』本文ではなく、『無量寿経論註』そのものである。

- ・論曰。出第五門者。以大慈悲觀察一切苦惱衆生。示応化身回入生死菌煩惱林中。遊戲神通至教化地以本願力回向故。是名出第五門。(大正八三卷六〇六上、大正八三卷六一七上)
- ここでは大きな字句の異同はない。「者」の

(7) これに関しては、当然「遇無空過者」が原型であろう。詳細については辻本俊郎(2001)を参照されたい。

(8) 辻本俊郎(2000)を参照されたい。

出入と「示」と「亦」の異同のみである。まず、「出第五門者」となっているのは、〔東〕〔開〕〔思〕〔磧〕〔杭〕〔永〕〔洪〕〔龍〕〔統〕〔光〕〔淨〕〔真〕〔宗〕〔親〕であり、その他のテキストは「出第五門」となっている。また、迦才（六四八年）『浄土論』と智儼（六〇二～六六八年）『華嚴經内章門等雜孔目』はこの文を引用しているが、「出第五門者」としているのである。

「示」を支持しているのは、〔東〕〔開〕〔思〕〔磧〕〔杭〕〔永〕〔洪〕〔龍〕〔統〕〔聖〕〔金〕〔七〕〔光〕〔淨〕〔真〕〔宗〕〔親〕で、さらには、迦才と智儼の引用文もこれを支持しているのである。その他のテキストは「示」ではなく、「亦」となっている。

- ・浄土論曰。莊嚴妙声功德成就者。偈言梵声悟深遠微妙聞十方故。此云何不思議。（中略）安可思議。莊嚴主功德成就者。偈言正覺阿彌陀法王善住持故。此云何不思議。（中略）以逕正覺阿彌陀善住持故。莊嚴眷属功德成就者。偈言如来淨華衆正覺華化生故。此云何不思議。（中略）焉可思議。（大正八三卷六一六中～下）
- ・又論曰。莊嚴清淨功德成就者。偈言觀彼世界相。勝過三界道故。此云何不思議。（中略）焉可思議。（大正八三卷六一六下）

「莊嚴妙声功德成就」「莊嚴主功德成就」「莊嚴眷属功德成就」を支持しているのは、〔統〕〔光〕〔常〕〔淨〕〔真〕〔宗〕〔親〕であり、その他は「〇〇功德成就」となっており、「莊嚴」の文言はない。「悟」（〔仏の〕浄らかな声が〔衆生を〕悟らせることは深遠である）については、「語」（〔仏の〕浄らかな声が語るところは深遠である）としているテキストがある。これは、音も旁も同じであるため、どちらか一方がオリジナルとしての原型を保っており、他方が改変されたものと考えられる⁽⁹⁾。「語」としているのは、〔麗〕〔頻〕〔中〕〔縮〕〔大〕〔遼〕である。

「此云何不思議。（中略）安可思議」「此云何不思議。（中略）以逕正覺阿彌陀善住持故」については、『無量寿經論註』の本文である。すなわち、「論曰」としながらも、『無量寿經論』の本文を引用していないのである。

- ・浄土論曰。世尊我一心。歸命盡十方。無礙光如来。願生安樂国。觀彼世界相。究竟如虚空。廣大無邊際。（大正八三卷六二四上）
- ・論曰。歸命盡十方。無礙光如来也。（大正八三卷六二六上）
- ・論曰。究竟如虚空。廣大無邊際也。（大正八三卷六二六上）

これらについては、各テキストには字句の異同はない。

- ・論曰。如来淨華衆 正覺華化生。又云。同一念仏無別道故。（大正八三卷六二六上）

「又云。同一念仏無別道故」は、『無量寿經論註』の本文である。

『浄土文類聚鈔』

- ・天親菩薩浄土論云。世尊我一心。歸命盡十方。無礙光如来。願生安樂国。我依修多羅。真實功德相。說願偈總持。与仏教相应。觀仏本願力。遇無空過者。能令速滿足。功德大宝海。（大正八三卷六四四中）

ここでは、「遇」と「過」である。これについては前述した。

『愚禿抄』卷上

- ・浄土論曰。世尊我一心 歸命盡十方 無礙光如来 願生安樂国。我依修多羅 真實功德相 說願偈總持 与仏教相应。（大正八三卷六四九上～中）

これについては、各テキストには字句の異同はない。

(9) 辻本俊郎（2000）を参照されたい。

『浄土三経往生文類』

- ・浄土論曰。莊嚴妙声功德成就者。偈言梵声悟深遠微妙聞十方故。此云何不思議。(中略)安可思議。莊嚴眷属功德成就者。偈言如来淨華衆正覺華化生故。此云何不思議。(中略)焉可思議。(大正八三卷六七三上、六七五中～下)

- ・又論曰。莊嚴清淨功德成就者。偈言觀彼世界相勝過三界道故。此云何不思議。(中略)焉可思議。(大正八三卷六七三上、六七五下)

ここでの字句の異同についても前述したので、省略する。

- ・浄土論曰。以本願力迴向故。是名出第五門(大正八三卷六七五下)

ここでは、各テキストには字句の異同は見られない。

- ・無量寿経優婆提舍願生偈曰。云何迴向不捨一切苦惱衆生。心常作願。迴向為首得成就大悲心故(大正八三卷六七六上)

「無量寿経優婆提舍願生偈」とするのは、〔統〕〔光〕〔常〕〔淨〕〔真〕〔宗〕〔親〕の七本で、これに対して「無量寿経優波提舍願生偈」とするのは、〔麗〕〔頻〕〔中〕〔縮〕〔統〕〔大〕のいわゆる高麗版系統のテキストである。その他としては、「無量寿経優波提舍」とするのが、〔磧〕〔杭〕〔永〕〔洪〕〔龍〕〔遼〕の五本であり、〔東〕〔開〕は「無量寿優波提舍経」となっており、〔聖〕〔金〕〔七〕の写本では「無量寿経論」となっているのである。

「不捨一切苦惱衆生。心常作願。迴向為首得成就大悲心故」の異同については前述した。

『如来二種迴向文』

- ・無量寿経優婆提舍願生偈曰。云何迴向不捨一切苦惱衆生。心常作願。迴向為首得成就大悲心故(大正八三卷六七七下)

ここでの異同に関しては前述した。

- ・浄土論曰。以本願力迴向故。是名出第五門(大

正八三卷六七八上)

ここでは字句の異同は前述したように見られない。

『往相迴向還相迴向文類』

- ・無量寿経優婆提舍願生偈曰。云何迴向不捨一切苦惱衆生。心常作願。迴向為首得成就大悲心故(大正八三卷六七八中)

- ・浄土論曰。以本願力迴向故。是名出第五門(大正八三卷六七八下)

これらに関しては既に述べた『如来二種迴向文』と引用文が全同である。

『尊号真像銘文本』

- ・婆藪般豆菩薩論曰。世尊我一心 歸命盡十方 無礙光如来 願生安樂国。我依修多羅 真実功德相 説願偈綵持 与仏教相応。觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 廣大無辺際(大正八三卷六八一中)

筆者が蒐集した『無量寿経論』テキストの中には「婆藪般豆」を支持するものは〔常〕〔真〕〔宗〕である。また、「婆藪槃豆」となっているのが、〔東〕〔開〕〔思〕〔磧〕〔杭〕〔麗〕〔永〕〔洪〕〔龍〕〔頻〕〔中〕〔縮〕〔大〕〔金〕であり、〔親〕は「婆藪槃頭」となっており、これを支持しているのは、〔淨〕である。

- ・又曰。觀仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海(大正八三卷六八一中)

ここでの異同は、「遇」と「過」である。これについては前述した。

『一念多念文意』

- ・浄土論曰。觀仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海(大正八三卷六九八上)

ここでの異同は、「遇」と「過」である。これについては前述した。

四、結論

以上、見てきたことから結論としては、親鸞はしばしば「浄土論曰」という文言であるのにかわらず、『無量寿経論註』の文を引用していることが見られた。このことから、親鸞は世親『無量寿経論』と曇鸞『無量寿経論註』とを区別していないことが明らかである。なるほど、『無量寿経論註』には『無量寿経論』本文の全文が引用されて、そのすべてにおいて曇鸞の註が施されているが、どうやら親鸞は『無量寿経論』を見て論じているわけではなく、『無量寿経論註』を依用したことが容易に理解できる。

また、〔統〕〔光〕〔常〕〔浄〕〔真〕〔宗〕は『無量寿経論註』の字句の異同を支持しているのであるが、これらは岸一英や筆者の研究による⁽¹⁰⁾と『無量寿経論註』に引用された『無量寿経論』本文と合致するのである。このことからしても、親鸞は『無量寿経論註』のみを見て「浄土論曰」として、『教行信証』などに引用していることに注意しなければならない。

親鸞における『無量寿経論』の受容は、決して『無量寿経論』そのものではなく、曇鸞の『無量寿経論註』を介してのものであったことが明らかにになったのである。

※テキストとしては、基本的に『大正新脩大蔵経』を使用した。また、教学伝道研究センター編（2011）も参照した。後者については浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員堀祐彰氏にご教示いただいた。ここに記して感謝する次第である。

参考文献

- 柏原祐義『真宗聖典』京都・法蔵館、1935
- 岸一英『『無量寿経論』校異の意義』『無量寿経論校異』、佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班、1999
- 教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典全書（二）宗祖篇 上』京都・浄土真宗本願寺派、2011
- 真宗勸学寮編『浄土論註校異』京都・真宗勸学寮、1925
- 真宗教学研究所編『浄土論註総索引』京都・東本願寺出版部、1972
- 辻本俊郎『『無量寿経論』テキスト考』『無量寿経論校異』、佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班、1999
- 辻本俊郎『『無量寿経論』テキストの検討』『仏教学会紀要』第8号、2000
- 辻本俊郎『『無量寿経論』願生偈の文献学的研究』『仏教学会紀要』第9号、2001 ①
- 辻本俊郎「天台系論書に引用される『無量寿経論』について」『アジア文化学科年報』第4号、2001 ②
- 辻本俊郎『『往生要集』に引用される『無量寿経論』について』『印度学仏教学研究』第50巻第1号、2001 ③
- 辻本俊郎「華嚴系論書に引用される『無量寿経論』について」『仏教学会紀要』第10号、2002
- 辻本俊郎『『無量寿経論』の流伝』『印度学仏教学研究』第52巻第1号、2004 ①
- 辻本俊郎『『無量寿経論』テキスト考（その2）－明版・清版を中心として－』『アジア文化学科年報』第7号、2004 ②
- 辻本俊郎『『無量寿経論』の諸本について』『アジア文化学科年報』第9号、2006
- 辻本俊郎「世親『無量寿経論』の題名をめぐる

(10) 岸一英（1999）、辻本俊郎（1999）、（2006）を参照

されたい。

て」大阪経済法科大学『東アジア研究』第
54号、2010
辻本俊郎『『無量寿経論』と Bodhiruci』『アジ
ア学科年報』第4号、2011 ①
辻本俊郎『『無量寿経論』諸本対照』私家版、
2011 ②
幡谷明編『浄土論註上下二卷対照表 曇鸞教学
の研究〈資料篇〉』京都・同朋舎、1989
早島鏡正・大谷光真『《仏典講座》浄土論註』

東京・大蔵出版、1987
藤田宏達『浄土三部経の研究』東京・岩波書店、
2007
佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研
究班編『無量寿経論校異』佛教大学総合研
究所、1999
増谷文雄・梅原猛『仏教の思想 10 絶望と歓
喜〈親鸞〉』角川ソフィア文庫、1996